

梶井基次郎

城のある町にて





城のある町にて



## ある午後

「高いところの眺めは、アアツ（と咳をして）また格段で  
ごわすな」

片手に洋傘、片手に扇子と日本手拭を持っていて。頭  
が奇麗に禿げていて、カンカン帽子を冠っているのが、  
まるで栓をはめたように見える。——そんな老人が朗ら  
かにそう云い捨てたまま峻の脇を歩いて行った。云つ

ておいてこちらを振り向くでもなく、眼はやはり遠い眺望へ向けたまま、さもやれやれといったふうに石垣のはなのベンチへ腰をかけた。――

町を外れてまだ二里ほどの間は平坦な緑。I湾の濃い藍あいが、そのの彼方に拡がっている。裾すそのぼやけた、そして全体もあまりかつきりしない入道雲が水平線の上に静かに蟠わだかまっている。――

「ああ、そうですね」少し間ま誤ごつきながらそう答えた時の自分の声の後味がまだ喉のどや耳のあたりに残っているような気がされて、その時の自分と今の自分とが変にそぐ

わなかつた。なんの拘りこたわもしらないようなその老人に  
対する好意が頬ほほに刻まれたまま、峻はまた先ほどの静か  
な展望のなかへ吸い込まれていった。——風がすこし吹  
いて、午後であつた。

一つには、可愛かわいい盛さかりで死なせた妹のことを落ちつい  
て考えてみたいという若者めいた感慨から、峻はまだ五  
七日を出ない頃の家を出てこの地の姉の家へやって来  
た。

ぼんやりしていて、それがよその子の泣声だと気がつ

くまで、死んだ妹の声の気持がしていた。

「誰だ。暑いのに泣かせたりなんぞして」

そんなことまで思っている。

彼女がごと切れた時よりも、火葬場かそうばでの時よりも、変

わった土地へ来てするこんな経験の方に「失った」という思いは強く刻まれた。

「たくさんの虫が、一匹の死にかけている虫の周囲に集まって、悲しんだり泣いたりしている」と友人に書いたような、彼女の死の前後の苦しい経験がやっと薄いヴェイル面紗のあちらに感ぜられるようになったのもこの土地へ



来てからであつた。そしてその思いにも落ちつき、新しい周囲にも心が馴染なじんで来るにしたがつて、峻には珍しく静かな心持がやつて来るようになった。いつも都会に住み慣れ、ことに最近は心の休む隙ひまもなかつた後で、彼はなおさらこの静けさの中で恭うやうやしくなつた。道を歩くのにもできるだけ疲れないように心掛ける。棘とげ一つ立てないようにしよう。指一本詰つめないようにしよう。ほんの些細ささいなことがその日の幸福を左右する。——迷信に近いほどそんなことが思われた。そして早ひやうりの多かつた夏にも雨が一度来、二度来、それがあがる度たびごとにやや

秋めいたものが肌に触れるように気候もなつて来た。

そうした心の静けさとかすかな秋の先駆さきがけは、彼を部屋の中の書物や妄想もうそうにひきとめてはおかなかつた。草や虫や雲や風景を眼の前へ据すえて、秘ひそかに抑おさえて来た心を燃えさせる、——ただそのことだけが仕甲斐しがいのあることのように峻には思えた。

「家の近所にお城跡しろあとがありましたして峻の散歩にはちようど良いと思います」姉が彼の母のもとへ寄来よこした手紙にこんなことが書いてあつた。着いた翌日の夜。義兄と姉と

その娘と四人ではじめてこの城跡へ登った。ひでり 早のため  
 うんかがたくさん田に湧わいたのを除じょうちゆうとう虫燈で殺してい  
 る。それがもうあと二三日だからというので、それを見  
 にあがったのだった。平野は見渡す限り除虫燈の海だっ  
 た。遠くになると星のように瞬またたいている。山の峡間たにあいが  
 ぼうと照らされて、そこから大河のように流れ出ている  
 所もあつた。彼はその異常な光景こうふんに昂奮して涙ぐんだ。  
 風のない夜で涼すずみかたがた見物に来る町の人びとで城跡  
 は賑にぎわっていた。暗やみのなかから白粉おしろいを厚く塗った町の娘  
 達がはしやいだ眼を光らせた。

今、空は悲しいまで晴れていた。そしてその下に町は  
葺いらかを並べていた。

白堊はくあの小学校。土蔵作りの銀行。寺の屋根。そしてそ  
こここ、西洋菓子もの間に詰めてあるカンナ屑くずめいて、緑  
色の植物が家々の間から萌もえ出ている。ある家の裏には  
芭蕉ばしようの葉が垂たれている。糸杉の巻きあがった葉も見える。  
重ね綿かっこうのような恰好かっこうに刈られた松も見える。みな黝くろずん  
だ下葉と新しい若葉で、いいふうな緑色の容積を造って  
いる。

遠くに赤いポストが見える。

乳母車なんかと白くペンキで書いた屋根が見える。

日をうけて赤い切地を張った張物板が、小さく屋根瓦やねがわら

の間に見える。――

夜になると火の点いた町の大通りを、自転車でやって

来た村の青年達が、大勢連れで遊廓ゆうかくの方へ乗ってゆく。

店の若い衆なども浴衣ゆかたがけで、昼見る時とはまるで異つ

たふうからだに身体をくねらせながら、白粉を塗った女をから

かってゆく。――そうした町も今は屋根瓦の間へ挟はさまれ

てしまつて、そのあたりに幟のぼりをたくさん立てて芝居小

屋がそれと察しられるばかりである。

西日よを除けて、一階も二階も三階も、西の窓すっかり日覆ひおいをした旅館がやや近くに見えた。どこからか材木を叩く音が——もともと高くもない音らしかったが、町の空へ「カーン、カーン」と反響した。

次つぎ止まるひまなしにつくつく法師が鳴いた。「文法の語尾の変化をやっているようだな」ふとそんなに思ってみて、聞いていると不思議に興が乗って来た。「チユクチユクチユク」と始めて「オーシ、チユクチユク」を繰返くりかえす、そのうちにそれが「チユクチユク、オーシ」

になつたり「オーシ、チュクチュク」にもどつたりして、  
 しまいに「スツトコチーヨ」「スツトコチーヨ」になつ  
 て「ジー」と鳴きやんでしまう。中途ちゆうとに横から「チュク  
 チュク」とはじめるのが出て来る。するとまた一つのは  
 「スツトコチーヨ」を終わつて「ジー」に移りかけてい  
 る。三重四重、五重にも六重にも重なつて鳴いている。  
 峻はこの間、やはりこの城跡のなかやしろにある社の桜の  
 木で法師蝉ほうしぜみが鳴くのを、一尺ほどの間近で見た。華車きやしゃな  
 骨しやぼんだまに石鹼玉のような薄い羽根を張つた、身体の小さい昆  
 虫に、よくあんな高い音が出せるものだど、驚きながら

見ていた。その高い音と関係があると云えば、ただその腹から尻尾しっぽへかけての伸縮であつた。柔毛にこげの密生している、節を持った、その部分は、まるでエンジンのある部分のような正確さで動いていた。——その時の恰好が思ひ出せた。腹から尻尾へかけてのブリツとした膨ふくらみ。隅すみずみまで力ではち切つたような伸び縮み。——そしてふと蟬一匹の生物が無上もったいに勿体ないものだという氣持に打たれた。

時どき、先ほどの老人のようにやって来ては涼りようをいれ、景色を眺めてはまた立ってゆく人があつた。



峻がここへ来る時によく見る、亭ちんの中で昼寝をしたり海を眺めたりする人がまた来ていて、今日は子守娘と親しそうに話をしている。

蝉取竿せみとりざおを持った子供があちこちする。虫籠むしかごを持たされた児こは、時どき立ち留まっては籠の中を見、また竿の方を見ては小走りに随ついてゆく。物を云わないでいて変に芝居のような面白さが感じられる。

またあちらでは女の子達が米つきばつたを捕えては、「ねぎさん米つけ、何とか何とか」と云いながら米をつかせている。ねぎさんというのはこの土地の言葉で神主かんぬし

のことを云うのである。峻は善良な長い顔の先に短い二本の触覚を持った、そう思えばいかにも神主めいたが、だが、女の子に後うしろあし脚を持たれて身動きのならないままに米をつくその恰好が呑気のんきなものに思い浮かんだ。

女の子が追いかける草のなかを、ばったは二本の脚を伸ばし、日の光を羽根一ぱいに負いながら、何匹も飛び出した。

時どき烟けむりを吐はく煙突があつて、田野はその辺りあたから展ひらけていた。レムブラントの素描デッサンめいた風景が散らばっている。

黝くろい木立。百姓家。街道。そして青田のなかに褪たい赭しやの煉瓦れんがの煙突。

小さい軽便けいべんが海の方からやって来る。

海からあがって来た風は軽便の煙を陸の方へ、その走る方へ吹きなびける。

見ていると煙のようではなくて、煙の形を逆に固定したまま玩具おもちゃの汽車が走っているようである。

ササササと日が翳かげる。風景の顔色が見る見る変わってゆく。

遠く海岸に沿って斜ななめに入り込んだ入江が見えた。――

峻はこの城跡へ登る度、幾度となくその入江を見るのが癖くせになっていた。

海岸にしては大きい立木が所どころ繁っている。その蔭にちよっぴり人家の屋根が覗のぞいている。そして入江には舟が舫もやっている気持。

それはただそれだけの眺めであった。どこを取り立てて特別心を惹ひくようなところはなかった。それでいて変に心が惹かれた。

なにかある。本当になにかがそこにある。と云ってその気持を口に出せば、もう空ぞらしいものになってしまう

う。

たとえばそれを故のない淡い憧憬あこがれと云ったふうの気持、と名づけてみようか。誰かが「そうじゃないか」と尋ねてくれたとすれば彼はその名づけ方に賛成したかもしれない。しかし自分では「まだなにか」という気持がする。

人種の異ったような人びとが住んでいて、この世と離れた生活を営んでいる。——そんなような所にも思える。とはいえそれはあまりお伽話とぎわなしめかした、ぴったりしいところがある。

なにか外国の画<sup>え</sup>で、あそこに似た所が描いてあったのが思い出せないためではないかとも思ってみる。それにはコンステイブルの画を一枚思い出している。やはりそれでもない。

では一体何だろうか。このパノラマ風の眺めは何に限らず一種の美しさを添えるものである。しかし入江の眺めはそれに過ぎていた。そこに限<sup>き</sup>って気韻<sup>きいん</sup>が生動している。そんな風に思えた。——

空が秋らしく青空に澄<sup>す</sup>む日には、海はその青よりやや温い深青に映った。白い雲がある時は海も白く光って見

えた。今日は先ほどの入道雲が水平線の上へ拡がってザボンの内皮の色がして、海も入江の真近までその色に映っていた。今日も入江はいつものように謎をかくして静まっていた。

見ていると、獣のようにこの城のはなから悲しい唸うなりごえ声を出してみたいような気になるのも同じであった。息苦しいほど妙みょうなものに思えた。

夢で不思議な所へ行っていて、ここは来た覚えがあると思っっている。——ちようどそれに似た気持で、えたいの知れない想い出が湧いて来る。

「ああかかる日のかかるひととき」

「ああかかる日のかかるひととき」

いつ用意したとも知れないそんな言葉が、ひらひらとひらめいた。――

「ハリケンハッチのオートバイ」

「ハリケンハッチのオートバイ」

先ほどの女の子らしい声が峻の足の下で次つぎに高く響いた。丸の内の街道を通ってゆくらしい自動自転車の爆音がきこえていた。

この町のある医者がそれに乗って帰って来る時刻であ



った。その爆音を聞くと峻の家の近所にいる女の子は我勝ちに「ハリケンハッチのオートバイ」と叫ぶ。「オートバ」と云っている児こもある。

三階の旅館は日覆をいつの間にか外はずした。

遠い物干台ものほしだいの赤い張物板ももう見つからなくなった。

町の屋根からは煙。遠い山からは蝸ひぐらし。

## 手品と花火

これはまた別の日。

夕飯と風呂を済ませて峻は城へ登った。

薄暮はくぼの空に、時どき、数里離れた市で花火をあげるの  
が見えた。気がつくくと綿で包んだような音がかすかにし  
ている。それが遠いので間の抜ぬけた時に鳴った。いいも  
のを見る、と彼は思っていた。

ところへ十七ほどを頭かしらに三人連れの男の児が来た。

これも食後の涼みらしかった。峻に気を兼ねてか静かに話をしている。

口で教えるのにも気がひけたので、彼はわざと花火のあがる方を熱心なふりをして見ていた。

末遠いパノラマのなかで、花火は星水母ほしくらげほどのさやけさに光っては消えた。海は暮れかけていたが、その方はまだ明るみが残っていた。

しばらくすると少年達もそれに気がついた。彼は心の中で喜んだ。

「四十九」

「ああ。四十九」

そんなことを云いあいながら、一度あがって次あがるまでの時間を数えている。彼はそれ等の会話をきくともなしに聞いていた。

「××ちゃん。花は」

「フロラ」一番年のいったのがそんなに答えている。――

城でのそれを憶い出しながら、彼は家へ帰って来た。家の近くまで来ると、隣家りんかの人が峻の顔を見た。そして慌あわてたように

「帰っておいでなしたぞな」と家へ云い入れた。

奇術が何とか座にかかっているのを見にゆこうかと云っていたのを、峻がぽっと出てしまったので騒いでいたのである。

「あ。どうも」と云うと、義兄は笑いながら

「はっきり云うとかんのがいかんのやさ」と姉に背負わせた。姉も笑いながら衣服を出しかけた。彼が城へ行っている間に姉も信子（義兄の妹）もこつてり化粧をしていた。

姉が義兄に

「あんだ、扇子は？」

「衣か囊くしにあるけど……」

「そうやな。あれも汚よごれてますで……」

姉が合が点てん合が点てんなどしてゆっくり捜しかけるのを、じゅ

うじゅうと音をさせて煙たば草こを吞のんでいた兄は

「扇子なんかどうでもええわな。早う仕した度たくしやんし」と

云きつて煙せ管るの詰きませったのを気にしていた。

奥の間で信子の仕度を手伝ってやっていた義母が

「さあ、こんなはどうやな」と云うつて団うち扇わを二三本寄せて持つて来た。砂糖屋などが配あつて行いった団扇である。

姉が種々と衣服を着こなしているのを見ながら、彼は信子がどんな心持で、またどんなふうで着付けをしているだろうなど、奥の間の気配に心をやったりした。やがて仕度のできたので峻はさきへ下りて下駄げたを穿はいた。

「勝子（姉夫婦の娘）がそこらにいますで、よぼってやつとくなさい」と義母が云った。

袖そでの長い衣服を着て、近所の子等らのなかに雑まじっている勝子は、呼ばれたまま、まだなにか云いあっている。

「『カ』ちうとこへ行くの」

「かつどうや」

「活動や、活動やあ」と二三人の女の子がはやした。

「ううん」と勝子は首をふって

「『ヨ』ちつとこへ行くの」とまたやっている。

「ようちえん？」

「いやらし。幼稚園、晩にはあれへんわ」

義兄が出て来た。

「早うお出でな。放つといてゆくぞな」

姉と信子が出て来た。白粉おしろいを濃くはいた顔が夕暗ゆうやみに浮

かんで見えた。さっきの団扇を一つずつ持っている。



「お待ち遠さま。勝子は。勝子、扇持ってるか」

勝子は小さい扇をちらと見せて姉に纏まといつきかけた。

「そんならお母さん、行って来ますで……」

姉がそう云うと

「勝子、帰ろ帰ろ云わんのやんな」と義母は勝子に云った。

「云わんのやんな」勝子は返事のかわりに口真似をして峻の手のなかへ入って来た。そして峻は手をひいて歩き出した。

往来に涼み台を出している近所の人びとが、通りすが

りに、今晚は、今晚は、と声をかけた。

「勝ちちゃん。ここ何てとこ？」彼はそんなことを訊いてみた。

「しようせんかく」

「朝鮮閣？」

「ううん、しようせんかく」

「朝鮮閣？」

「しようせんかく」

「朝—鮮—閣？」

「うん」と云って彼の手をびしやと叩いた。

しばらくして勝子から

「しようせんかく」といい出した。

「朝鮮閣」

牴牾もどかしいのはこつちだ、と云ったふうに寸分ちが違わない

ように似せてゆく。それが遊戯になってしまった。しま

いには彼が「松仙閣しょうせんかく」といっているのに、勝子の方で

は知らずに「朝鮮閣」と云っている。信子がそれに気が

ついて笑い出した。笑われると勝子は冠かんむりを曲げてしま

った。

「勝子」今度は義兄の番だ。

「ちがいますともわらびます」

「ううん」鼻<sup>び</sup>ぐえをして、勝子は義兄を打つ真似をした。義兄は知らん顔で

「ちがいますともわらびます。あれ何やったな。勝子。

一遍<sup>いっぺん</sup>峻さんに聞かしたげなさい」

泣きそうに鼻をならし出したので信子が手をひいてやりながら歩き出した。

「これ……それから何というつもりやったんや？」

「これ、<sup>わらび</sup>蕨とは違えますって云うつもりやったんやな

あ」信子がそんなに云って庇<sup>か</sup>護<sup>ば</sup>ってやった。

「一体どこの人にそんなことを云うたんやな？」今度は半分信子に訊きいている。

「吉峰よしみねさんのおじさんにやなあ」信子は笑いながら勝子の顔を覗のぞいた。

「まだあつたぞ。もう一つどえらいのがあつたぞ」義兄がおどかすようにそう云うと、姉も信子も笑い出した。

勝子は本式に泣きかけた。

城の石垣に大きな電灯がついていて、後ろの木々に皎々こうこうと照っている。その前の木々は反対に黒ぐろとした蔭かげになっている。その方で蝉がジツジツジと鳴いた。

彼は一人後ろになって歩いていった。

彼がこの土地へ来てから、こうして一緒に出歩くのは今夜がはじめてであつた。若い女達と出歩く。そのことも彼の経験では、極めて稀まれであつた。彼はなんとなしに幸福であつた。

少し我儘わがままなところのある彼の姉と触れ合っている態度に、少しも無理がなく、——それを器用にやっているのではなく、生地きじからの平和な生まれ附つきでやっている。信子はそんな娘であつた。

義母などの信心から、天理教様に拝んでもらえと云わ

れると、素直すなおに拜んでもらっている。それは指の傷だったが、そのため評判の琴も弾ひかないでいた。

学校の植物の標本を造っている。用事に町へ行つたついでなどに、雑草をたくさん風呂敷へ入れて帰つて来る。勝子が欲しがるので勝子にも頒わけてやったりなどして、独ひとりせつせとおしをかける。

勝子が彼女の写真帖きまを引き出して来て、彼のところへ持つて来た。それを極きまり悪そうにもしないで、彼の聞くことを穩おだやかにはきはきと受け答える。——信子はそんな好もしいところを持つていた。

今彼の前を、勝子の手を曳ひいて歩いている信子は、家の中で肩縫かたぬい揚げのしてある衣服を着て、足をによきによき出している彼女とまるで違っておとなに見えた。その隣に姉が歩いている。彼は姉が以前より少し瘦やせて、いくらかでも歩き振りがよくなったと思った。

「さあ。あんた。先へ歩いて……」

姉が突然後ろを向いて彼に云った。

「どうして」今までの気持で訊かなくともわかっていたがわざと彼はとぼけて見せた。そして自分から笑ってしまった。こんな笑い方をしたからにはもう後ろから歩い



てゆくわけにはゆかなくなつた。

「早う。氣持が悪いわ。なあ。信ちゃん」

「……」笑いながら信子も點頭うなずいた。

芝居小屋のなかは思ったように蒸し暑むかつた。

水番みづばんというのか、銀杏返しいちようがえに結むすつた、年の老ふけた婦おんな

が、座蒲団ざぶとんを数かずだけ持つて、先に立たつてばたばた敷しいて

しまつた。平場ひらばの一番後あとろで、峻しげが左の端はし、中へ姉あねが来

て、信子が右の端はし、後ろへ兄あにが座まつた。ちようど幕間まくあいで、

階下かいたは七分通り詰ぢまつていた。

先刻の婦が煙草盆を持って来た。火が埋うずんであつて、暑いのに気が利かなかつた。立ち去らずにぐずぐずしている。何と云つたらいいか、この手の婦特有な狡猾ずるい顔かおつき附で、眼をきよろきよろさせている。眼顔で火鉢を指したり、そらしたり、兄の顔を盗み見たりする。こちらが見てよくわかっているのにと思ひ、財布の銀貨を袂たもとの中中で出し悩みながら、彼はその無ぶしつけ駄に腹が立つた。

義兄は落ちついてしまつて、まるで無感覺である。

「へ、お火鉢」婦はこんなことをそわそわ云つてのけせわて、忙せわしそうに揉もみ手をでしながらまた眼をそらす。やつと

銀貨が出て婦は帰って行つた。

やがて幕があがつた。

日本人のようでない、皮膚の色が少し黒みがかつた男が不熱心に道具を運んで来て、時どきじろじろと観客の方を見た。ぞんざいで、面白く思えなかつた。それが済むと怪<sup>あや</sup>しげな名前の印度人<sup>インド</sup>が不作法なフロツクコートを着て出て来た。何かわからない言葉で喋<sup>しゃべ</sup>つた。唾<sup>つば</sup>液<sup>だえき</sup>をとばしている様子で、褪<sup>さ</sup>めた唇の両端に白く唾<sup>つば</sup>がたまつていた。

「なんて云つたの」姉がこんなに訊<sup>き</sup>いた。すると隣のよ

その人も彼の顔を見た。彼は閉口してしまった。

印度人は席へ下りて立会人を物色している。一人ひとりの男が腕をつかまれたまま、危あやう気げな羞はじわらい笑をしていた。その男はとうとう舞台へ連れてゆかれた。

髪かみの毛を前へおろして、糊のりの寝た浴衣を着、暑いのに黒足袋くろあしぶくろを穿はいていた。にこにこして立っているのを、先ほどの男が椅子いすを持って来て坐らせた。

印度人はひどいやつであった。

握手をしようとして云って男の前へ手を出す。男はためらっていたが思い切って手を出した。すると印度人は自分

の手を引き込めて、観客の方を向き、その男の手振を醜みにくく真似て見せ、首根つ子を縮めて、嘲笑あざわらって見せた。毒々しいものだった。男は印度人の方を見、自分の元いた席の方を見て、危な気に笑っている。なにか訳のありそうな笑い方だった。子供か女房かがいるのじゃないか。堪たまらない。と峻は思った。

握手が失敬になり、印度人の悪ふざけはますます性しょうがわるくなつた。見物はその度に笑つた。そして手品がはじまつた。

紐ひもがあつたのは、切つてもつながつているという手品。

金属の瓶びんがあつたのは、いくらでも水が出るといふ手品。

——ごく詰まらない手品で、硝子ガラスの卓子テーブルの上のものは減つていった。まだ林檎りんごが残っていた。これは林檎を食つて、食つた林檎の切きれが今度は火を吹いて口から出て来るといふので、試しに例の男が食わされた。皮ごと食つたといふので、これも笑われた。

峻はその箸はしにも棒にもかからないような笑い方を印度人がする度に、何故なぜあの男はなんとかしないのだらうと思つていた。そして彼自身かなり不愉快ふゆかいになつていた。そのうちにふと、先ほどの花火が思い出されて来た。

「先ほどの花火はまだあがっているだろうか」そんなことを思った。

薄明りの平野のなかへ、星水母ほしくらげほどに光っては消える遠い市の花火。海と雲と平野のパノラマがいかにも美しいものに思えた。

「花は」

「Flora.」

たしかに「Flower.」とは云わなかった。

その子供といい、そのパノラマといい、どんな手品師も敵かなわないような立派な手品だったような気がした。

そんなことが彼の不愉快をだんだんと洗っていった。いつもの癖くせで、不愉快な場面を非人情に見る、——そうすると反対に面白く見えて来る——その気持がものになりかけて来た。

下等な道化に独りで腹を立てていた先ほどの自分が、ちよつと滑稽こっけいだったと彼は思った。

舞台の上では印度人が、看板画そっくりの雰囲気のかで、口から盛んに火を吹いていた。それには怪しげな美しささえ見えた。

やつと済むと幕が下りた。



「ああ面白かった」ちよつと嘘のような、とつてつけたように勝子が云った。云い方が面白かったので皆笑つた。――

美人の宙釣り。ちゆうづ

力業。ちからわざ

オペレット。浅草気分。

美人胴切。どうぎり

そんなプログラムで、晩おそく家へ帰った。

病  
気

姉が病気になった。脾腹ひばらが痛む、そして高い熱が出る。

峻は腸チブスではないかと思った。枕元で兄が

「医者さん呼びにやろうかな」と云っている。

「まあよろしいわな。かい虫かもしれませんで」そして峻にもつかず兄にもつかず

「昨日きのうあないに暑かったのに、歩いて帰って来る道で汗がちつとも出なんだの」と弱よわしく云っている。

その前の日の午後、少し浮かぬ顔で遠くから帰って来るのが見え、勝子と二人で窓からふざけながら囃し立てた。

「勝子、あれどこの人？」

「あら。お母さんや。お母さんや」

「嘘いえ。よそのおばさんだよ。見ておいで。家へは這入らないから」

その時の顔を峻は思い出した。少し変だったことは少し変だった。家のなかばかりで見馴れている家族を、ふと往来でよそ目に見る——そんな珍しい気持で見た故と

峻は思っていたが、少し力がないようでもあった。

医者が来て、やはりチブスの疑いがあると云って帰った。峻は階下で困った顔を兄とつき合わせた。兄の顔には苦しい微笑が凝こっていた。

腎臓の故障だったことがわかった。舌の苔こけがなんとかで、といって明瞭にチブスとも云い兼ねていた由を云って、医者も元気に帰って行った。

この家へ嫁とついで来てから、病気で寝たのはこれで二度目だと姉が云った。

「一度は北牟婁きたむろで」

「あの時は弱ったな。近所に氷がありませんでなあ、夜中の二時頃、四里ほどの道を自転車たたで走って、叩き起こして買うたのはまあよかったやさ。風呂敷へ包んでサドルの後ろへ結ゆわえつけて戻って来たら、擦すれとりましてな、これだけほどになつとつた」

兄はその手つきをして見せた。姉の熱のグラフにして、二時間おきほどの正確なものを造ろうとする兄だけ

あつて、その話には兄らしい味が出ていて峻も笑わされた。

「その時は？」

「かい虫をわかしとりましたんじや」

——一つには峻自身の不<sup>ふ</sup>検<sup>し</sup>束<sup>だ</sup>な生活から、彼は一度肺を悪くしたことがあつた。その時義兄は北牟婁でその病気が癒<sup>なお</sup>るようと神詣<sup>もう</sup>でをしてくれた。病気がややよくなつて、峻は一度その北牟婁の家へ行つたことがあつた。そこは山のなかの寒村で、村は百姓と木樵<sup>きこり</sup>で、養蚕<sup>ようさん</sup>などもしていた。冬になると家の近くの畑まで猪<sup>いのしし</sup>が芋<sup>いも</sup>を掘

りに来たりする。芋は百姓の半分常食になっていた。その時はまだ勝子も小さかった。近所のお婆さんが来て、勝子の絵本を見ながら講釈しているのに、象のことを鼻捲はなまき象、猿のことを山の若い衆とかやえんとか呼んでいた。苗字みょうじのないという児がいるので聞いてみると木樵きせりの子だからと云って村の人は当然な顔をしている。小学校には生徒から名前の呼び棄すてにされている、薰かおるという村長の娘が教師をしていた。まだそれが十六七の年頃だった。――

北牟婁はそんな処ところであつた。峻は北牟婁での兄の話

には興味が持てた。

北牟婁にいた時、勝子が川へ陥はまったことがある。その話が兄の口から出て来た。

——兄が心臓脚かっけ気で寝ていた時のことである。七十を越こした、兄の祖母で、勝子の曾祖母にあたるお祖母ばあさんが、勝子を連れて川へ茶碗を漬つけに行った。その川というのが急な川で、狭かったが底はかなり深かった。お祖母さんは、いつでも兄達が捨てておけというのに、姉が留守だったりすると、勝子などを抱だきたがった。その時も姉は外出していた。



はあ、出て行つたな。と寢床の中で思っていると、しばらくして変な声がしたので、あつと思つたまま、ひかれるように大病人が起きて出た。川はすぐ近くだった。見ると、お祖母さんが変な顔をして、「勝子が」と云つたのだが、そして一生懸命に云おうとしているのだが、そのあとが云えない。

「お祖母さん。勝子が何とした！」

「……」手の先だけが激しくそれを云っている。

勝子が川を流れてゆくのが見えているのだ！ 川はちようど雨のあとで水かさが増していた。先に石の橋があ

って、水が板石とすれすれになっている。その先には川の曲るところがあつて、そこはいつも渦が巻いている所だ。川はそこを曲つて深い沼のような所へ入る。橋か曲り角で頭を打ちつけるか、流れて行つて沼へ沈みでもしようなものなら助からないところだつた。

兄はいきなり川へ跳とび込んで、あとを追つた。橋までに捕つかえるつもりだつた。

病気の身だつた。それでもやっと橋の手前で捕えることはできた。しかし流れがきつくて橋を力すに上ろうと思つてもとうてい駄だ目めだつた。板石と水の隙間すきまは、やっと

勝子の頭ぐらいいは通せるほどだったの、兄は勝子を差し上げながら水を潜り、下手でようやくあがれたのだった。勝子はぐったりとなっていた。逆にしても水を吐かない。兄は気が気でなく、しきりに勝子の名を呼びながら、背中を叩いた。

勝子はけろりと気がついた。気がついたが早いか、立つとすぐ踊り出したりするのだ。兄はばかされたよう、何だか変だった。

「このべべ何としたんや」と云って濡れた衣服をひっぱって、足が滑った拍子に

気絶しておったので、全く溺れたのではなかったとみえる。

そして、何とまあ、いつもの顔で踊っているのだ。

兄の話のあらましはこんなものだった。ちようど近所の百姓家が昼寝の時だったので、自分がその時起きてゆかなければどんなに危険だったかとも云った。

話している方も聞いている方も惹き入れられて、兄が口をつぐむと、静かになった。

「わたしが帰って行ったらお祖母ばあさんと三人で門で待っ

てはるの」姉がそんなことを云った。

「何やら家にいてられなんだわさ。着物を着かえてお母ちゃんを待つとろと云うたりしてなあ」

「お祖母さんがぼけはったのはあれからでしたな」姉は声を少しひそませて意味の籠こもった眼を兄に向けた。

「それがあってからお祖母さんがちよつとぼけみたいに なりましたなあ。いつまで経たつてもこれに（と云って姉を指し）よしやんに済まん、よしやんに済まんと言いましてなあ」

「なんのお祖母さん、そんなことがあるうかさ、と云つ

ているのに……」

それからのお祖母さんは目に見えてぼけて行って一年ほど経ってから死んだ。

峻にはそのお祖母さんの運命がなにか惨酷ざんこくな気がした。それが故郷ではなく、勝子のお守りでもする気を出かけて行った北牟婁の山の中だっただけに、もう一つその感じは深かった。

峻が北牟婁へ行ったのは、その事件の以前であった。お祖母さんは勝子の名前を、その当時もう女学校へ上っていたはずの信子の名と、よく呼び違ちがえた。信子はその

当時母などこちらにいた。まだ信子を知らなかった峻には、お祖母さんが呼び違える度ごとに、信子という名を持った十四五の娘が頭に親しく想像された。

## 勝子

峻は原っぱに面した窓に倚よりかかって外を眺めていた。

灰色の雲が空一帯を罩こめていた。それはずっと奥深く

も見え、また地上低く垂れ下がっているようにも思えた。あたりのものはみな光を失って静まっていた。ただ遠い病院の避雷針だけが、どうしたはずみか白く光って見える。

原っぱのなかで子供が遊んでいた。見てみると勝子もまじっていた。男の児が一人いて、なにか荒いあら遊びをしているらしかった。

勝子が男の児に倒たおされた。起きたところをまた倒された。今度はぎゅうぎゅう押えつけられている。

一体何をしているのだろう。なんだかひどいことをす



る。そう思つて峻は目をとめた。

それが済むと今度は女の子連中が——それは三人だったが、改札口へ並ぶように男の兎の前へ立った。変な切符切りがはじまつた。女の子の差し出した手を、その男の兎がやけに引っ張る。その女の子は地面へ叩きつけられる。次の子も手を出す。その手も引っ張られる。倒された子は起きあがつて、また列の後ろへつく。

見ているところであつた。男の兎が手を引っ張る力加減に変化がつく。女の子の方ではその強弱をおっかなびつくり期待するのが面白いのらしかつた。

強く引くのかと思うと、身体つきだけ強そうにして軽く引つ張る。すると次はいきなり叩きつけられる。次はまた、手を持ったというくらいの軽さで通す。

男の児は小さい癖くせにどうかすると大人の——それも木挽こびきとか石工いしくとかの恰好かっこうそっくりに見えることのある児で、今もなにか鼻唄でも歌いながらやっているように見える。そしていかにも得意気であつた。

見ているとやはり勝子だけが一番余計強くされているように思えた。彼にはそれが悪くとれた。勝子は婉えん曲きよくに意地悪いぢあくされているのだな。——そう思うのには、一つ

は勝子が我儘わがままで、よその子と遊ぶのにも決していい子にならないからでもあった。

それにしても勝子にはあの不公平がわからないのかな。いや、あれがわからないはずはない。むしろ勝子にとって、わかってはいながら瘦我慢やせがまんを張っているのが本当らしい。

そんなに思っているうちにも、勝子はまたこっぴどく叩きつけられた。瘦我慢を張っているとすれば、倒された拍子に地面と睨にらめっこをしている時の顔かおつき附は、一体どんなだろう。——立ちあがる時には、もうほかの子と同

じような顔をしているが。

よく泣き出さないものだ。

男の児がふとした拍子にこの窓を見るかもしれなからと思つて彼は窓のそばを離れなかつた。

奥の知れないような曇り空のなかを、きらりきらり光りながら過よぎつてゆくものがあつた。

鳩はと？

雲の色にぼやけてしまつて、姿は見えなかつたが、光の反射だけ、鳥にすれば三羽ほど、鳩一流のどこにあてがあるともない飛び方で舞つていた。

「あああ。勝子のやつ奴<sup>め</sup>、勝手に注文して強くしてもらっているのじゃないかな」そんなことがふっと思えた。いつか峻が抱<sup>だ</sup>きすくめてやった時、「もつとぎうつと」と何度も抱きすくめさせた。その時のことが思い出せたのだった。そう思えばそれもいかにも勝子のしそうなことだった。峻は窓を離れて部屋のなかへ這<sup>はい</sup>入った。

夜、夕飯が済んでしばらくしてから、勝子が泣きはじめた。峻は一階でそれを聞いていた。しまいにはそれを鎮<sup>しず</sup>める姉の声が高くなって来て、勝子もあたりかまわず泣

きたてた。あまり声が大きいので峻は下へおりて行つた。信子が勝子を抱いている。勝子は片手を電燈の真下へ引き寄せられて、針を持った姉が、てのひら掌へ針を持ってゆこうとする。

「そとへ行つて棘とげを立てて来ましたんや。知らんとおつたのが御飯を食べるとき醤油しょうゆが染しみてな」義母が峻にそう云つた。

「もつとぎうとお出し」姉は怒つてしまつて、じゃけん邪慳に掌を引つ張っている。その度に勝子は火の附くように泣声を高くする。

「もう知らん、放つといてやる」しまいに姉は掌を振り離してしまった。

「今はしよわないで、××膏こうをつけてくくつとこうよ」義母が取りなすように云っている。信子が薬を出しに行つた。峻は勝子の泣声に閉口してまた二階へあがつた。

薬をつけるのに勝子の泣声はまだ鎮まらなかつた。

「棘はどうせあの時立てたに違いない」峻は昼間のことを思い出していた。びしやつと地面へうつつぶせになつた時の勝子の顔はどんなだつたらう、という考えがまた蘇よみがえつて来た。

「ひよっとしてあの時の瘦我慢を破裂させているのかも  
しれない」そんなことを思って聞いていると、その火が  
つくような泣声が、なにか悲しいもののように峻には思  
えた。

## 昼と夜

彼はある日城の傍そばの崖の蔭に立派な井戸があるのを見  
つけた。



そこは昔のさむらい士しの屋敷跡のように思えた。畑とも庭ともつかない地面には、梅の老木があつたり南瓜かぼちやが植えてあつたり紫蘇しそがあつたりした。城の崖からは太いたくま逞しい喬きょうぼうく木や古いつばき椿つばきが緑の衝立ついたてを作っていて、井戸はその蔭かげに坐まっていた。

大きな井桁いげた、堂々とした石の組み様、がっしりしていて立派であつた。

若い女の人おおだらいが二人、洗濯物を大盥すすですす濯すすいでいた。

彼のいた所からは見えなかつたが、その仕掛ははね釣つるべ瓶びんになつてくいるらしく、汲くみあげられて来る水は大き

い木製の釣瓶桶おけに溢れあふ、樹々の緑が瑞みずみずしく映っている。盥の方の女の人待つふりをすると、釣瓶の方の女の人は水を空あけた。盥の水が躍り出して水玉の虹がたつ。そこへも緑は影を映して、美しく洗われた花崗岩かこうがんの畳石の上を、また女の人素足の上を水は豊かに流れる。

羨うらやましい、素晴らしく幸福せうれつそうな眺めだった。涼すずし  
そんな緑の衝立の蔭。確かに清冽せうれつで豊かな水。なんとなく魅みせられた感じであった。

きょうは青空よい天気

まえの家でも隣でも

水汲む洗う掛ける干す。

国定教科書にあったのか小学唱歌にあったのか、少年の時に歌った歌の文句が憶おもい出された。その言葉には何のたくみも感ぜられなかったけれど、彼が少年だった時代、その歌によって抱いだいたしんに朗らかな新鮮な想像が、思いがけず彼の胸におし寄せた。

かあかあからす鳥が鳴いてゆく、

お寺の屋根へ、お宮の森へ、  
かあかあ鳥が鳴いてゆく。

それには画がついていた。

また「四方<sup>よも</sup>」とかいう題で、子供が朝日の方を向いて手を広げている図などの記憶が、次つぎ憶い出されて来た。

国定教科書の肉筆めいた楷書の活字。また何という画家の手に成ったものか、角のないその字体と感じのまるで似た、子供といえは<sup>まるがお</sup>円顔の優等生のような顔をしてい

ると云ったふうの、挿画さしえのこと。

「何とか権所有」それをゴンシヨユウと、人の前では読まなかつたが、心のなかで仮に極きめて読んでいたこと。

そのなんとか権所有の、これもそう思えば国定教科書に似つかわしい、手紙の文例の宛名のような、人の名。そんな奥附の有様ありさままでが憶い出された。

——少年の時にはその画のとおりの所がどこかにあるような気がしていた。そうした単純に正直な兎がどこかにいるような気がしていた。彼にはそんなことが思われ

それ等<sup>ら</sup>はなにかその頃の憧<sup>しょうけい</sup>憬の対象でもあつた。単純で、平明で、健康な世界。——今その世界が彼の前にある。思いもかけず、こんな田舎の緑樹の蔭に、その世界はもつと新鮮な形を具<sup>そな</sup>えて存在している。

そんな国定教科書風な感傷のなかに、彼は彼の営むべき生活が示<sup>し</sup>唆<sup>さ</sup>されたような気がした。

——食ってしまいたくなるような風景に対する愛着と、幼い時の回<sup>かい</sup>顧<sup>こ</sup>や新らしい生活の想像とで彼の時どきの瞬間が燃えた。また時どき寝られない夜が来た。

寝られない夜のあとでは、ちよつとしたことにすぐ底熱い昂奮が起きる。その昂奮がやむと道端でもかまわな  
いすぐ横になりたいような疲労が来る。そんな昂奮は楓かえで  
の肌を見てさえ起こった。――

楓樹ふうじゆの肌が冷えていた。城の本丸の彼がいつも坐るベ  
ンチの後ろであつた。

根方に松葉が落ちていた。その上を蟻ありが清らかに匍はつ  
ていた。

冷たい楓の肌を見ていると、ひぜんのようについでい  
る蘚こけの模様が美しく見えた。

子供の時の莫蔭遊いかげあそびびの記憶——ことにその触感が蘇よみがえった。

やはり楓の樹の下である。松葉が散って蟻が匍はつてい  
る。地面にはでこぼこがある。そんな上へ莫蔭を敷いた。

「子供というものは確かにあの土地のでこぼこを冷たい  
莫蔭の下に感じる 蹠あしのうらの感覚の快さを知っているもの  
だ。そして莫蔭を敷くや否やすぐその上へ跳とび込んで、  
着物ぐるみじかに地面の上へ転ころがれる自由を楽しんだり  
する」そんなことを思いながら彼はすぐにも頬ほっぺたを楓  
の肌につけて冷やしてみたいような衝動を感じた。



「やはり疲れているのだな」彼は手足が軽く熱を持って  
いるのを知った。

\* \* \* \* \*

「私はおまえにこんなものをやろうと思う。

一つはゼリーだ。ちよつとした人の足音にさえいく  
つもの波紋はもんが起こり、風が吹いて来ると漣さざなみをた  
てる。色は海の青色で——御覧そのなかをいくつ

も魚が泳いでいる。

もう一つは窓掛けだ。織物ではあるが秋草が茂っているくさむら叢いになつてゐる。またそこには見えないが、色づきかけた銀杏いちようの木がその上に生えている氣持。風が来ると草がさわぐ。そして、御覽。尺取虫しやくとりむしが枝から枝を葡くつてゐる。

この二つをおまえにあげる。まだ出来あがらないから待っているがいい。そして詰らない時には、ふつと思ひ出してみるがいい。きつと愉快になるから。」

彼はある日葉書へそんなことを書いてしまった、もちろん遊戯ではあったが。そしてこの日頃の昼となし夜となしに、時どきふと感じる気持のむずかゆさを幾分いくぶんはかせたような気がした。夜、静かに寝られないでいると、空を五位ごいが啼ないて通った。ふとするとその声が自分の身体からだのどこかでしているように思われることがある。虫の啼く声などもへんに部屋の中でのように聞こえる。

「はあ、来るな」と思っているとえたいの知れない気持が起こって来る。——これはこの頃眠れない夜のお極きまり

のコースであつた。

変な気持は、電燈を消し眼をつぶっている彼の眼の前へ、物が盛んに運動する気配を感じさせた。彫ぼうだい大なものの気配が見るうちに裏返つて微塵みじんほどになる。確かどこかで触つたことのあるような、口へ含んだことのあるような運動である。廻まわ転機のように絶えず廻まわっているように、寝ている自分の足の先あたりを想像すれば、途方もなく遠方にあるような気持にすぐそれが捲まき込まれてしまふ。本などを読んでいると時とすると字が小さく見え、て来ることがあるが、その時の気持にすこし似ている。

ひどくなると一種の恐怖さえ伴ともなって来て眼を閉ふさいでは  
いられなくなる。

彼はこの頃それが妖術が使えるようになる気持だと思  
うことがあった。それはこんな妖術であった。

子供の時、弟と一緒に寝たりなどすると、彼はよくう  
つつ伏ぶせになって両手で墻かきを作りながら（それが牧場の  
つもりであった）

「芳雄君よしお。この中に牛が見えるぜ」と云いながら弟を  
だました。両手にかこまれて、顔で蓋ふたをされた、敷布の  
上の暗黒のなかに、そう云えばたくさんの牛や馬の姿が

想像されるのだった。——彼は今そんなことは本当に可能だという気がした。

田園、平野、市街、市場、劇場。船着場や海。そう云った広大な、人や車馬や船や生物でちりばめられた光景が、どうかしてこの暗黒のなかへ現れてくれるといい。そしてそれが今にも見えて来そうだった。耳にもその騒音が伝わって来るように思えた。

葉書へいたずら書きをした彼の気持も、その変てこなむず痒さがゆから来ているのだった。

## 雨

八月も終りになった。

信子は明日市の学校の寄宿舎へ帰るらしかった。指の傷が癒なおったので、天理様へ御礼に行つて来いと母に云いわれ、近所の人に連れられて、そのお礼も済ませて来た。その人がこの近所では最も熱心な信者だった。

「荷札にふだは？」信子の大きな行李こうりを縛しばってやっていた兄が

そう云った。

「何を立って見とるのや」兄が怒おこったようにからかうと、信子は笑いながら捜しに行つた。

「ないわ」信子がそんなに云つて歸つて来た。

「カフスの古いので作つたら……」と彼が云うと、兄は「いや、まだたくさんあつたはずや。あの抽出ひきだし見たか」信子は見たと云つた。

「勝子がまた蔵しまい込んでるんやないかいな。一遍いっぺん見ても」兄がそんなに云つて笑つた。勝子は自分の抽出しへごく下らないものまで拾つて来ては蔵い込んでいた。



「荷札ならここや」母がそう云って、それ見たかという  
ような軽い笑顔をしながら持って来た。

「やっぱり年寄がおらんとあかんで」兄はそんな情愛の  
籠こもったことを云った。

晩には母が豆を煎いっていた。

「峻さん。あんたにこんなのはどうですな」そんなに云  
って煎りあげたのを彼の方へ寄せた。

「信子が寄宿舎へ持って帰るお土産みやげです。一升ほど持っ  
て帰っても、じきにぺろつと失くなるのやそうで……」

峻が語を聴きながら豆を咬かんでいると、裏口で音がし

て信子が帰って来た。

「貸してくれはったか」

「はあ。裏へおいといた」

「雨が降るかもしれんで、ずっとなかへ引き込んでおいで」

「はあ。ひき込んである」

「吉峰さんのおばさんがあしたお帰りですかて……」信子は何かおかしそうに言葉を杜断とぎらせた。

「あしたお帰りですかて？」母が聞きかえした。

吉峰さんのおばさんに「いつお帰りです。あしたお帰

りですか」と訊かれて、信子が間諛まごついで「ええ、あしたお帰りです」と云ったという話だった。母や彼が笑うと、信子は少し顔を赧あかくした。

借りて来たのは乳母車だった。

「明日一番で立つのを、行李乗せて停車場まで送って行ってやります」母がそんなに云って訳を話した。

大變だな、と彼は思っていた。

「勝子も行くて？」信子が訊くと、

「行くのやと云うて、今夜は早うからおやすみや」と母が云った。

彼は、朝も早いのに荷物を出すなんて面倒だから、今夜のうちに切符を買って、先へ手荷物で送ってしまったらしいと思つて、

「僕、今から持つて行つて来ましようか」と云つてみた。一つには、彼自身体裁屋なので、年頃の信子の気持ちを先廻りさきまわしたつもりであつた。しかし母と信子があまり「かまわない、かまわない」と云うのであちらまかせにしてしまった。

母と娘と姪めいが、夏の朝の明け方を三人で、一人は乳母車をおし、一人はいでたちをした一人に手を曳ひかれ、停

車場へ向かってゆく、その出発を彼は心に浮かべてみた。  
美しかった。

「お互<sup>たがい</sup>の心の中でそうした出発の楽しさをあてにして  
いるのじゃなからうか」そして彼は心が清く洗われるの  
を感じた。

夜はその夜も眠りにくかった。

十二時頃夕立がした。その続きを彼は心待ちに寝てい  
た。

しばらくするとそれが遠くからまた歩み寄せて来る音

がした。

虫の声が雨の音に変わった。ひとしきりするとそれはまた町の方へ過ぎて行った。

蚊帳かやをまくって起きて出、雨戸を一枚繰くった。

城の本丸に電燈が輝いていた。雨に光沢を得た樹きの葉がその灯の下で数知れない魚鱗うろこのような光を放っていた。

また夕立が来た。彼は鬨しきこの上へ腰をかけ、雨で足を冷やした。

眼の下の長屋の一軒の戸が開いて、ねまき姿の若い女

が唧筒ポンプへ水を汲くみに来た。

雨の脚が強くなつて、とゆがごくりごくり喉を鳴らし出した。

気がつくくと、白い猫が一匹、よその家の軒下をわたつて行つた。

信子の着物が物干竿ものほしざおにかかったまま雨の中にあつた。筒袖つつそでの、平常着ていたゆかたで彼の一番眼に慣れた着物だった。その故か、見ていると不思議なくらい信子の身体つきが髻ほっふつとした。

夕立はまた町の方へ行つてしまった。遠くでその音が

している。

「チン、チン」

「チン、チン」

鳴きだしたこおろぎの声にまじって、質の緻密ちみつな玉を硬度の高い金属ではじくような虫も鳴き出した。

彼はまだ熱い額を感じながら、城を越えてもう一つ夕立が来るのを待っていた。

(大正十三年十一月)







日本文学電子図書館

---

「梶井基次郎 ちくま日本文学028」

著 者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年11月10日 第1刷

---



日本文学電子図書館